

ケル也、然レバ止事无キ寺也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔徒然草上〕世の人の心まどはす事、色欲にはしかず、人の心はおろかなるものかな、匂ひなどはかりの物なるに、しばらく衣裳にたきものすとしりながら、えならぬ匂ひには、必心ときめきする物なり、久米の仙人の物あらふ女のはぎのしろきを見て、通をうしなひけんは、誠に手あしはだへなどのきよらに、肥あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし、

〔日本紀略一〕延喜元年八月十五日、陽勝仙人飛行、

〔扶桑略記二十三〕昌泰四年元年延喜八月、天台沙門陽勝於大和國吉野郡堂原寺邊飛行空中、元是

能登國人、其父僧善迭、俗姓紀氏也、母亦同夢吞日光、即有姪胎、生年十一、而辭母家登天台、從律師玄日勤學、一聞亦不再問、晝學夜修、送年之間、背不着席、舌不嘗施、或自書法華經、鎮以讀誦、或兼寫瑜伽教、常以持念、登金峯山之次、尋古仙草庵、彌存幽居之志、到吉野郡牟田寺、三年苦行、初絕粒食、菜、次止菜菓食、後每日服粟一粒、夏上金峯山、冬下牟田寺、無倦勤修、終到同郡堂原寺、乃以止住、不食无飢、無衣如暖、如此送年、遂以飛去、吉野山久住禪衆云、陽勝上人早既成仙、或逢龍門寺邊、忽以遠去、或遇熊野社下、飛行空中、其疾如風、其輕同雲、昔日同行法侶之輩、至于舊居草堂、廻皆觀樹、古破法衣懸其枝末、驚怪進覩、是即陽勝昔時所着袈裟也、其法衣端有固結處、乃披見之、裏彼手跡、其狀僞以此袈裟、可送堂原寺延命聖人者、見付之人取彼法衣、授于延命上人、云々已上傳

〔法華驗記中〕叡山西塔寶幢院陽勝仙人

陽勝仙人、俗姓紀氏、能登國人也、勝蓮華院空日律師弟子、元慶三年始登叡山、年十一歲矣、情神聰明、一聞經教、再不問之、暗誦法花、習學止觀、厭世頑翬、好修禪定、心意平等、毀譽不動、喜怒不改、勇猛精進、更不睡眠、亦不臥息、慈悲甚深、憐愍一切、見裸形人、脫衣與之、見飢羸輩、分口食施、蟻虱蚊虻、餒身令飽、手自書寫妙法華經、常讀誦、登金峯山、尋仙舊室、籠住南京牟田寺、習仙方法、最初斷穀、菜蔬爲食、次離